七里恒順門下の異才・奇才たち

中西直樹

はじめに

七里恒順（一八三五～一九〇〇）は、明治期を代表する名僧として知られ、自坊・博多万行寺（真宗本願寺派）において多くの人びとを教化した。七里恒順が自坊に開設した私塾「龍華教校」に在籍した学生は五百人以上を数え、七里の法話を聴聞するために全国から集まった者は三十万人を超えたとされる。(1)

しかし、門人の多さに比して、そのなかからは、宗政の中枢で活躍した者や、真宗学者として名を馳せた者をほとんど出していない。七里と親密に交流した利井明朗は、七里の学問傾向とその門人について、次のように評している。

> 師の学問は行学であつて、決して解学ではなかつたといふて宜からうと思ふ。師の所化の中に之といふ学者が出なかつたのを見ても分かる。(2)

利井明朗が言うように、その門下から著名な真宗学者があまり出ていないものの、宗政のあり方や伝統的真宗理解

に対し疑義を呈し、宗派の局外にあって仏教ジャーナリズム・女子教育・社会事業などの実践を通じて、真宗の近代化に大きな足跡を残した者を数多く輩出した。

本稿では、七里恒順の門下のなかから、そうした代表的人物を取り上げるとともに、七里恒順が近代真宗史に与えた影響についても考えてみたい。

一、教団批判者〔小川丈平〕

七里恒順の門下からは、本願寺派によって異端・異議者との烙印を押され排斥された人物を数名出している。この点に関して、利井鮮妙は、七里が多くの道俗を薫陶教化したことを評価しつつも、「種々の異解者が其門より出でたるは、元より異解者の罪ながら、最も遺憾とする所なり」[3]と書き残している。利井鮮妙は、「異解者」とされた人物を特定してはいないが、おそらく、その代表として小川丈平（号「独笑」）を想定していたと思われる。小川丈平については、かつて論じたことがあり[4]、ここでは、簡単にその人物像について概説しておこう。

小川丈平（法名「独笑」、一八三四～一九一七）は、一八三四（天保五）年に豊前国築上郡千束村（現在の福岡県豊前市）に生まれている。生家は、本願寺派末寺の門徒であり、代々庄屋をつとめる豪農であった。五歳で母親と死別し篤信家の祖母に育てられ、長じて中津の手嶋物斎の塾に入り漢籍に通暁したという。明治初年には百姓一揆を指導したとの嫌疑をうけ、千束藩により入牢させられたが、藩解体後は地元の名士として、教育・政治・産業の発展に尽くし、県会議員もつとめた。しかし、中年の頃に大病を患い、四十六才で夕照山に草庵を結び閑居した。一八八五（明治十八）年、某寺に詣でた際に、念仏は尊きものと話したところ、住職より「念仏は尊き故に申すわけではない」と反論されたことが契機となって、更に八年の間草庵に籠り、三度にわたって一切経を読破し、ついに称名念仏こそが仏本願の行であるとの確信を得た。

小川丈平と七里恒順との交流は、小川が夕照山の草庵に閑居後に数年してはじまったようである。龍谷大学大宮図書館所蔵の『求法人記名録』には、小川丈平（五十六年）が、明治二十二（一八八九）年二月二十七日に万行寺門前の宿「一朝軒」に到着し、三月四日まで滞在したことが記載されており、この間に七里の法話を聴聞したようである。七里に私淑した小川は、その後も数回にわたり博多を往復して交流を重ねた(5)。

一八九八（明治三十一）年五月には、小川の『七里恒順師法話妄評録』（以下『妄評録』と略記）が刊行された(6)。この『妄評録』は、前年に刊行された七里の法話筆記録『本願成就文法話』（以下『法話』と略記）(7)について論評したものであり、小川のもとを訪れた七里の門人杉本昇道(8)が、小川より『妄評録』の筆記本を手渡され、杉本の発意により公刊された。その「序」によれば、杉本は公刊に先だって、病床にあった七里の枕元で『妄評録』を朗読すると、七里は大いに小川の「抹殺」論に感じ、随喜讃歎の意を表したという(8)。

そもそも『法話』は、阿弥陀仏の第十八願の文言について逐次解説したものであり、人間のはからいの無力さが繰り返して説かれ、不可思議の本願力で往生することを思い取って、報謝の念仏に尽すべきことが説諭されている。小川の『妄評録』は、七里の法話が文字化され後世に残されたことを賞賛しつつも、その法話の「抹殺」を主張するのである。小川は、その理由として、次のような七里の法話に関するエピソードを紹介している。

> 数年前一日和上説教し玉へるに。其将に終らんとするや。高声に来会の道俗に告て曰く。御同行方一時間余の説教は。みな取消取消と仰せられたり。退散の後諸国遠近来詣の諸人。下宿に会す。一人曰く今日は和上説教を取消すは当然なり。是和上の私にあらず仏説なり。釈迦世尊八万の法を説たまふに。説ては取けし説ては取けし。ことごとく取消したまふ。ゆえに和上も説教を取けしたまふなり。（中略）我等は聴ては取けし。聞きてはとりけし。聞くこと〳〵に取消とすべし。人間て曰くさやうに取けして。我等はいかんか心得て帰国すへきや。曰く

唯南無阿弥陀仏〳〵と申すばかりにて帰国す。三旬五旬説教を聴聞申すことは。こと〳〵く博多に打捨て。念仏ばかりにて帰郷すべしと。時に一座中の人々或は鬱気の色あり。或は不分明の相あり。或は笑を含むもあり。不同のまゝ退散す。(9)

この文のなかで「一人曰く」以下は、おそらく小川の意見を示していると考えられる。続けて『妄評録』は、「たゞ本願を信じて念仏を申すばかりにて。文解理解に心を依止せるは取けしにはあらずや。正教の本意とは。一切の正教は依止する為にあらず。只一行一心をうるまての要なり」という。称名念仏こそが仏本願の行であり、解釈や説明はそこに行き着くまでの手立てに過ぎず、これに拘泥することが徹底的に否定されるのである。『妄評録』は、利井が「解学」ではないと評した七里の立場を、小川が忠実に継承していることを示しているといえよう。

また、後に小川は、信心正因の立場に反し自力念仏の異端の教説を提唱していると批判されたが、七里自身へも同様の批判はあったようであり、七里自身も次のように述べている。

老僧（わし）も以前は兎角の批評をうけ、イヤ万行寺は称名正因ぢや、七里は異安心の骨頂ぢやと云はれたども、更に頓着せず、たゞ仏恩報謝をのみして居たれば、近来は世間の人から、格別これと云ふこともきかぬ様になりました。(10)

その一方で、七里は多くの人びとを教化し、社会的にも柔軟な対応をみせたのに対し、小川は「教人信報恩と申すことあれとも、これは凡常の及所に非す」(11)と、教化活動を放棄して、称名念仏を唯一絶対の行とする傾向を先鋭化させていった。その背景には、門信徒に懇志を要求し続けるとともに、急速に金権主義的な傾向を強め、財界との連携

を深めていった本願寺派の動向があったと考えられる。[12] 小川は、「聞法の心おこりたる人々、金銭手足を以て報謝の行を名として、苦しむることの少しとせず」[13]といい、称名念仏を唯一絶対の行とする立場から、宗派への懇志を報謝の行することを否定した。小川とその信奉者（小川宗）に厳しい弾圧が加えられたのも、このことに起因していた。

一方、七里自身も宗派の中央集権的あり方には、強い批判的認識を有していたようである。七里は、学階や堂班の昇進を辞退し、一八八二年には本山の要職である執行（現総務）を辞して自坊に帰り、民衆教化活動に専念した。七里には、「本山の改革は末寺の僧侶と門徒の信仰をしつかりと起さしめば出来るものではない」[14]との信念があったとされ、本山主導の改革論には批判的見解を持っていたようであり、利井明朗も次のように回想している。

> 俺は師とは誠に親しき間柄であつて、常々衷心の所懐を打明けて話されたから、能く師の心中を知つて居る。師は本山の施政と意見を異にして居ながら、之を心に秘して他人に語らぬと決心されて居たから、表面にはそんな気分は毫しも見えなんだ。こゝにも師の克己心の強いことが表はれて居る。[15]

本山主導の施政方針にあえて異を唱えても効果のないことを悟り、自信教人信のあり方を自らが示すことで、真宗教団の進むべき道筋を示そうとしたものと考えられる。これに対し、小川は七里の批判精神を受け継ぎながらも、その自信教人信のあり方を継承することができなかったのである。

二、伝統教学批判者〔野々村直太郎〕

浄土教理解について斬新な提言をなし、僧籍剝奪の処分を受けた野々村直太郎（号「梅所」「木石学人」「黒谷西畔子」など、法号「慧暢」、一八七〇～一九四六）も、七里恒順から大きな影響を受けた一人である。

野々村は、一八七〇（明治三）年、鳥取に旧池田藩士の長男として出まれ、西本願寺門前にあった顕道学校に学んだ後、上京して開成中学を経て、八九年に第一高等中学校に入学した。九四年には帝国大学文科大学哲学科へと進学し、九七年に大学院に進み、九九年に京都の第三高等学校教授に就任した。一九〇六年に仏教大学講師を兼任し、二〇（大正九）年には第三高等学校教授を辞して、仏教大学教授となった[16]。ちなみに、その二年後に仏教大学は旧大学令に基づく龍谷大学に改組されている。

野々村は、これに先立つ一九一七年に『中外日報』の論説委員となったが、その際に寄稿した「入社の辞」で、宗教界のあり様を激烈に批判している。前後して同紙に「浄土教批判」を連載しているが、この際に大きな反響はなかったようである[17]。ところが、一九二三年に立教開宗法要が執行され、それ以後に大きな法要がないことを意識した野々村は[18]、同年一月二十五日から二月二十八日まで、伝統教学への批判的立場をより鮮明にした「浄土教革新論」を『中外日報』に連載し、五月十五日にこれに一冊にまとめ、『浄土教批判』と題して中外日報社より出版した。ここで野々村は、往生思想を「モハヤ現代及び将来に容れらるべき思想ではない」と断じ、浄土教の本質は人間の分別取捨のはからいのとらわれから脱却することにあるとした。

こうして「浄土教革新論」の連載がはじまると、二月十六日に本願寺派集会で緊急質問がはじまった。続いて宗派内外の学者・宗教者から多くの批判がおこり、関係論文三十数編にのぼる激しい論争が展開された。五月二十四日には、野々村が監正局に呼び出され、是山恵覚・弓波瑞明により審査され、異安心との決定が下された。八月には野々村の僧籍剥奪が決まり、さらに本願寺派は龍谷大学に野々村の解職を要求した。龍谷大学教授団はこれを拒否したが、十二月二十日に野々村は依願退職に追い込まれた。

野々村の主張に関しては、すでに先行研究によって、真宗信仰の本質を歴史的現実との関わりで問うた点を評価する一方で、統一的・科学的な宗教概念規定が欠如し恣意的な解釈となっている点や、宗教を政治・倫理とを単純切離

し国家権力への随順を許した点、新たな建設的浄土観を提示できなった点など、種々の問題点が指摘されている。[19] また、論争についても、野々村が、「神話の奴隷」「和装せるインド人」「色魔の論理」「痴蛙的浄土教徒」などの刺激的表現を用いて挑発的姿勢をとり、宗学者側もその提言を前向きに受け止めることはなかった。[20]

ところで、野々村は『浄土教批判』の冒頭で、「この東岸一片の囈語、謹んで之を安養界裡七里恒順大和上の宝前にさゝげ、その法乳の深恩に答ふ。」と記している。[21] そこで本稿では、次に野々村と七里との関係について考察しよう。

野々村が学んだ顕道学校は、一八八五（明治十八）年六月、松田甚左衛門ら旧弘教講の関係者により設立され、弘教講の拠点であった北近畿・鳥取などの在家信者の子弟らが入学した。英語・数学・植物・生理・化学・読書・体操、農商の実務が教授された一方で、真宗に基づく徳育に重点が置かれていた。全寮制をとり、入学生は正信偈、三部経、御文章、珠数、肩衣を持参して入寮し、本山での毎朝の勤行や法要に参列した。この学校で野々村は、真宗学を是山恵覚に、仏教学を松浦僧梁に学んだと回想している。[22]

その後、野々村は上京して第一高等中学校で学んでいたが、同時期に在学していた真宗寺院出身者である龍口了信や近角常観らと交流した様子を確認できない。また彼らのはじめた仏教青年会組織「徳風会」にも参加していなかったようである。[23] しかし、野々村は信仰上の煩悶を抱いて、一八九二年夏に七里恒順の許を訪ねている。[24] その訪問の目的について、野々村は「唯救済者の存在といふことさへ明了に信ぜられたならば、忽ち安心は出来るに相違ない。（中略）仏の有無と云ふことが先づ第一に決定せらるべき問題である。」と述べている。[25]

七里の法話を聴聞しても、仏の存在に確信を得られなかった野々村は、七里に直接質問をぶつけた。野々村は、その際の会話の内容を次のように記している。

私はこふいふ様に申しました。色々法話を聞きましたけれども、どうも今少し明了でない様に思はれる。そんならばと云つて、此処が不都合であると云ふ様な廉は一つもない様であるが、全体が不明了であること、恰も一幅の墨絵を薄い墨で描いた様な気持が致しますと申しました。老師は、それでよい唯其不明了といふことが救済には何の関係もないと云ふことさへ承知して居れば邪魔にはならぬ。と簡単に答へられたことを記臆して居ります。[26]

この七里の発言を聞いた野々村は、「仏の実在を信ずるといふことは決して救済の必要条件でありませぬ。[27]」というふうに理解した。この理解が、後の阿弥陀仏の浄土建立の教説を一種の神話として否定する主張へと発展していったと考えられるが、その理解が七里の発言の真意を正しく受け止めたものと言えるであろうか―。

七里は、単に仏意が個々の人間の知性や理性を超えたものであることを言っているに過ぎないと考えられる。七里は、野々村と同様に信心上の煩悶を抱いた別の女性に対して、「あなたが遠方からこうして参られるのは信心を頂こうと思うて見えたのあらうが、信心を頂くのでなくて、自力心をすてるのである」と述べたという。[28]後述する伊藤長兵衛も、七里との初対面で「地獄極楽の実否不審なるを御教示願ひたるに」、七里から何の回答なかった。ところが、数日参聴する内に疑問が氷解した伊藤は、前言を撤回して仏説を信じ往生の道を進むべきであるとの感想を述べたところ、「慈悲の網にかゝりなされたよ」との言葉を受けたという。[29]

ところが、野々村はあくまで自らの知性によって、仏実在可否の問題を判断・解決しようとした。龍谷大学で野々村の教えを受けた桜井鎔俊の回想によれば、野々村に対して「人間の思慮分別を超える」という信仰の境地に到達する道についての質問したところ、「聞いて聞いて聞く抜くことです。考えて考えて考え抜くことです。」と回答したという。[30]桜井は、この野々村の答えに納得できず、七里の高弟であった村田静照のもとへ赴くこととなった。

野々村は、七里の許を訪ねた後、かねてから親交のあった利井明朗の前住地である大阪常見寺の衆徒として得度し、

東京での学生生活を放棄して、龍華教校に入学することを企図した。しかし、翌九三年夏に再度、万行寺を訪ねると、七里は中風で半身不随となっていた。野々村は龍華教校への入学を断念して東京にもどった。野々村の去った後、七里は周囲の者に僧衣姿で現れた野々村について、「彼はアンナ姿になつて馬鹿なことをしたものだ」と言ったという。[31]

七里が、なぜそのように述べたのかは明らかではない。しかし、七里は野々村が自分の真意を曲解していることに気づいていたのかもしれない。いずれにせよ、野々村は伝統教学の行き詰りを打開する糸口を七里に求めたのであり、もう少し長く七里の教えを受けることができたならば、その浄土教批判も少し違った展開となっていたのかもしれない。

三、仏教ジャーナリスト〔真渓涙骨〕

龍華教校の門下生のなかでも、ひときわ異彩を放つのが、宗教新聞『中外日報』を創刊した真渓涙骨（本名「正遵」、一八六九～一九五六）であろう。涙骨は、自分の名前が表に出ることを極端にきらい、その経歴を語ることもほとんどなかった。『中外日報』の経営者が涙骨であることが公表されたのは、創刊後十六年も経ってからのことであり、大谷派の石川舜台が、「忍術師」と評したほどであった。[32]まずは、『中外日報』創刊に至るまでの涙骨の生涯を概説しよう。

涙骨は、一八六九（明治二）年に越前国敦賀藩田結浦（現福井県敦賀市田結）の本願寺派興隆寺に、同寺住職真渓正善の長男として生まれた。父正善は養子として若狭から入寺し、母が興隆寺の出身で月輪みなといった。長じて涙骨は、本願寺派普通教校（龍谷大学の前身校の一つ）に入学したが、本山前の堀川に飛び込んで鯉を捕まえるなど悪戯が多く、まもなく退学となった。[33]普通教校の同窓生名簿には、「敦賀郡田結村（田結浦の誤記か―筆者補注）月輪正遵」[34]と記されており、当初は母方の姓を名乗っていたようである。

普通教校退学後、涙骨は龍華教校に転じた。龍谷大学大宮図書館所蔵『龍華教校入校名簿』には、「福井県越前国敦賀郡田結浦　興隆寺衆徒　月輪正遵　明治十八年四月廿八日入」との記載がある。普通教校は、一八八四年十二月二十三日に仮開業し、翌八五年四月十八日に開校式を挙行しており[35]、涙骨は正式開校の直後に龍華教校に転校したことになる。涙骨の転校は、普通教校の生徒取締で七里恒順の門下生でもあった多田賢順が仲介したものと推察される[36]。しかし、涙骨は龍華教校でも僧侶修行に身が入らず、手刷り新聞を発行するなどして、七里に叱正を受けて退校したとされる[37]。後に涙骨は「私は足かけ二年間、七里和上の膝下に養はれた[38]」と述べており、一八八六年中に龍華教校を退校したようである。

その後の約十年間、涙骨は各地を放浪したようである。神戸の某新聞で主筆となった後、自坊に帰って『南越新聞』を創刊した。しかし、この新聞も長く続かず、東京へ行き、次に京都に移った。この時期の詳しいことはわかっていないが、涙骨はさまざまなペンネームを用いて、新聞雑誌に投稿していたようである。ペンネームひとつが「望天」であったとされる[39]。涙骨は、当時の仏教界のことを次のように回想している。

> 仏教界では『明教新誌』があり、『奇日新報』というのが干河岸貫一氏や山本貫通氏によって発行されていました。西本願寺からは『開明新報』というのが出て、海外宣教会と相提携し松山松太郎氏らを中心として、欧文雑誌も発行され可なり仏教のために気を吐いたものです[40]。

本願寺派の本格的な新聞事業への関与は、一八八〇年二月に東京で創刊された『龍谷新潮』を支援したことにはじまる。背景には、前年のいわゆる「東移事件」による宗派内世論の混乱があったと考えられる。『龍谷新潮』は同年九月に『教海新潮』と改題され、さらに八三年二月三日に至って、新たに『奇日新報』が創刊された。創刊にあたっ

て、本願寺派の関係者・関係団体が賛成社員となって発行を支えたが、なかでも七里恒順は最も熱心な支援者であった。[41]『奇日新報』を創刊した干河岸貫一は、後に回想録『書窓漫題』のなかで次のように記している。

> 奇日新報の発行に就ては意外に本派有志の賛助を得たり発行部数多からさりしか常に一千部を出入したり殊に筑前の万行寺七里恒順師の如き余僅に面識あるに過されとも師は特に手簡を送り筑前一円の師か門下の僧侶を勧誘し数十の購読者を周旋せられしのミならす其代金をも取纏め郵便為替を以送付せられ頗る厚意を以奇日新報の発達を助けられしは師を以第一とす[42]

干河岸貫一（号「桜所」、一八四八～一九三〇）[43]は、福島県本願寺派大乗寺に生まれ、本願寺派訳文係として数冊の翻訳書の出版を手がけた後、『朝日新聞』『東京日日新聞』などで新聞記者をつとめた。朝日新聞時代には、東京支局通信主任として「大日本帝国憲法」全条文を大阪本社に打電し、他紙に先がけて報道したことは有名である。社内きっての速筆で、電文書きでは並ぶべき者はいないと評された。黎明期の日本ジャーナリズム支えた新聞記者に僧侶は以外に多く、大谷派寺院出身で、戦後に文部大臣となった安藤正純も『朝日新聞』『明教新誌』などの記者として活躍した。涙骨は彼らの活躍に、憧れを抱いていたと考えられる。

『奇日新報』には、涙骨の寄稿文を散見する。例えば、涙骨は、一八八六年五月二十五日付の同紙に遊学中に貸与した書籍の返却を求める広告を出している。そこには「福井県越前国敦賀郡田結浦　月輪正遵」と記載されており、この頃までには自坊に帰っていたようである。その後も、敦賀や京都の状況について、たびたび『奇日新報』に寄稿している。[44]また八九年十月に同紙に寄せた一文では、[45]『奇日新報』のような通仏教的新聞の必要性を説き、仏教者がこうした新聞の発行を支えるべきことを訴えている。

『奇日新報』は、本願寺派からの経済的支援を受けて刊行されたが、一般紙の記者を長年つとめてきた干河岸の編集方針もあって、仏教界を取り巻く動向が広い視点から報道されていた。当時、『奇日新報』（奇数日発行）は、偶数日発行で大内青巒が主宰する『明教新誌』と並んで、仏教界を代表する新聞であった。ところが、経営は苦しく、兼務する朝日新聞記者の仕事が忙しくなった貫一は、一八八九年三月末に『奇日新報』の経営を譲渡し、発行元が東京から京都に移った(46)。

当時、京都の普通教校は文学寮に改組され、校内では、反省会が『反省会雑誌』（後の『中央公論』）、海外宣教会が『海外仏教事情』を刊行していた。しかし、仏教新聞はなく、両会の関係者は、より広い情報をより早く伝えるため、『奇日新報』の経営を引き継いだと考えられる。編集人を務めた神代洞通は、一八五五（安政二）年に福岡県糸島の本願寺派教念寺に生まれ、七里恒順のもとで宗乗余乗を修めた後、普通教校の開校とともに教員に就任した。海外宣教会の発足後には、その幹事も務めていた(47)。反省会本部、海外宣教会本部、新報社（『奇日新報』発行元）は、いずれも西本願寺門前の玉本町の同じ場所に置かれ、姉妹団体の関係にあった。

一八八九年十一月、『奇日新報』は『開明新報』と改題されて日刊紙となった。現在、『開明新報』は、京都府立京都学・歴彩館などに数号が所蔵されているのみであり、その実態は不明なことが多い。しかし、『反省会雑誌』『海外仏教事情』などに広告が頻繁に掲載されている。それらによれば、「宗派党派に関係なく公平無私の意見」によることを表明し、香川の今里游玄、熊本の藤岡法真、大阪の桜井義門、福岡の秦法励、長野の宮本恵順ら、各地の本願寺派有力者が購買委員を引き受けていた(48)。

涙骨は、『開明新報』の創刊後しばらくして上洛し、その刊行に関与したようである。同紙の関係者とは普通教校在校時から旧知の間柄で、なかでも編集人の神代洞通は同じく七里恒順の門下生でもあった。涙骨が一八九二年三月に刊行した『同行の鏡（一名成信記）』という書の奥付には、「編輯者　月輪正遵　福井県平民　京都市下河原通南町

第一番戸寄留」と記されており、[49]この頃までには京都に居を移していたようである。

仏教界全体への貢献を企図する『開明新報』が手がけた事業に、同年九月刊行の『日本仏教現勢史』がある。この書は、全国の読者に仏教諸団体の調査を呼びかけ編纂されたもので、二百を超える団体の概要が記されている。ただ、少年教会と婦人教会は多数に及ぶため掲載を見合わせ、改めて一書にまとめ刊行する予定であった。しかし、刊行には至らなかったようである。『日本仏教現勢史』の巻頭の「例言」には、「一日本仏教現勢史は去明治廿四年八月以降開明新報社に於て再び。明治廿五年三月以降月輪正遵の名に於て。前後都合十ケ月三百日間に募集したるものなり」と記載され、著者の一人に「月輪正遵」の氏名が記されている。また本書には、荻野独園（臨済宗）、町田久成（天台宗）、渥美契縁（大谷派）、土宜法龍（真言宗）ら各宗派の碩学のほか、大内青巒、中西牛郎ら有力居士が題字や賛辞を寄せている。[50]本書の編集を通じて、涙骨は各宗派の有力者の知遇を得たと考えられる。

しかし、『開明新報』も長くは続かなかった。財政面など、多くの苦難に際会したようだが、やはり一八九二年七月におこった文学寮改正事件の影響が大きかったようである。[51]この事件は、藤島了穏寮長と中西牛郎の反目に端を発し、文学寮の全教員が解職となった。これにより、普通教校・文学寮以来の開明派は宗派から一掃された。やがて、海外宣教会が解散に追い込まれた。『開明新報』は『京都毎日新報』と改題され、さらに九三年三月には、『本山月報』と合併して『京都新報』と改められ、本山執行部の介入が強まった。[52]

涙骨はどうしていたのであろうか―。涙骨は、『日本仏教現勢史』以降、数冊の本を出版し、雑誌への投稿も続けていたようである。特に興味深いのは、一八九五年に「月輪望天」名義で、『仏教最近之敵―一名、天理教之害毒―』という書籍を出していることである。[53]本書は、大阪の新聞『新浪華』の連載記事をまとめたものであり、『新浪華』は西郷従道を会頭とする国粋主義団体「国民協会」の機関紙であった。涙骨は、この『新浪華』で堺利彦とともに記者をつとめていた。[54]

一方、一八九六年十二月、本願寺派開明派の最後の出版拠点であつた反省雑誌社が東京に移転した。翌九七年四月には、隔日刊行されていた『京都新報』が廃刊となった。かわって、同年七月二十五日から『教海一瀾』（現『本願寺新報』の前身誌）が創刊されたが、月二号の発行に過ぎず、誌面も宗派広報誌としての性格の強い雑誌であった。ときあたかも、宗派の利害意識が強まり、諸宗派の協調関係が崩壊に向かいつつあった[55]。特定の宗派に偏らない仏教ジャーナリズムが消滅した京都で、涙骨は『開明新報』の伝統の復活を期して、同年十月一日に『教学報知』（一九〇二年一月『中外日報』と改題）を創刊したと考えられる。

ところで、常光浩然によれば、涙骨は手刷り新聞を発行するなどの行為が咎められ、龍華教校を放校処分になったとされるが、七里恒順は涙骨のことをどのように考えていたのであろうか―。涙骨は、後年次のような回想を残している。

私は足かけ二年間、七里和上の膝下に養はれたものだが、持つて生れた悪性は容易に改まらず、真に難治難救の悪人と見られてゐた。それでも時には和上は膝下近く呼ばれて

人間の一生は汚いものだ、一々裸体ひんむいたら満足な顔して如来さんの前に出られる資格のあるものは一人もゐなからう、それでも仕方ない、いかにどろ〳〵と濁り果てた中にも清き一線だけは、たとひ微かでも必ず美しく貫けよ、それが人間に生れた所詮でもあり念仏喜ぶ甲斐でもある。

と教示された。之くらゐ私の一生を通じて私の頭蓋骨に刻み付けられた鋭い活人剣はなかつた。斯く申せばな何だか我身を飾るやうで愧かしいが、私が殆んど過ぐる半世紀近く世にもはえない難事業に幾度となく自殺までを思ひながら春風秋雨の一人旅を続けて曾て傍観をふらず路草を食わはずに裏の細道をのみ一向専念に歩んで来たのも、一にこの精神的基礎を固められた強い指導力の賜である[56]。

『奇日新報』の発行を強く支援した七里恒順は、仏教ジャーナリズムの必要性を認識し、涙骨に期待していたのかもしれない。しかし、その事業を継続することの困難さも熟知して、右のような言葉を涙骨に贈ったのであろう。涙骨も、『中外日報』の発行でさまざまな苦難を重ねるなかで、七里の教えが身に染みたようであり、一九三八（昭和十三）年五月の七里の三十七回忌に際して、墓参のため五十年ぶりに万行寺を訪れている。[57]

四、女子教育家〔小林芳次郎・梅高秀山〕

七里恒順が、博多柳町の娼妓のために開設された翠糸学校と深い関係を結び、その生徒を対象とする博多柳町婦人教会を組織して教化にあたったことは別に論じた。[58]

七里の感化を受けたなかからも、女子教育に尽力した人物を数名輩出している。そのひとり小林芳次郎（一八六八～一九四二）は、福岡市に生まれ、七里恒順の薫陶を受け深く真宗に帰依した。一八八九（明治二十二）年に同志と協力して福岡仏教研究会を設立し、仏教演説会を開くなどの活動を展開していた。[59] 九一年に上京し、麹町区裁判所に書記として勤めるかたわら、神田錦町の国民英学会に学んだ。[60] 九三年に警視庁の文官普通試験に合格し、警視庁に奉職し、日清戦争中の陸軍省の軍属を経て、戦後は北海道庁・内務省・農商務省などの官吏を歴任した。[61]

その一方で小林は、一八九九年に大谷派僧侶の平松理英とともに品川婦人教会を設立し、平松の自坊正徳寺で毎日曜日に少女への教育事業に従事し、さらに一九〇二年に妻雛子とともに芝三田君塚町に雙蓮女子日曜学校を開設した。[62]

そして、翌〇三年四月、東京に仏教主義の女学校のないことを遺憾に思った小林芳次郎・雛子夫妻は、東京芝三田君塚町に高輪裁縫女学校を創立した。和洋裁と倫理を専攻科、読書・習字・編物・点茶・花を随意科とし、倫理については次のような方針を表明していた。

本校は又大ひに仏教々義を遵奉し、一面には世間的道念の進捗を図り、又一面には女子の心霊上に無窮の生命と無限の大安慰とを与へんと欲す、さは云へ宗教信仰の自由は、我が帝国憲法の保障する所なり、故に吾人は来学者の総てに対し、漫りに仏教の信仰を強迫するものであらず、然りと雖も本校設立者の微衷は茲に在て存せり、故に来学者は予め此の意を諒せられん事を希望す(63)

高輪裁縫女学校は、本願寺派の高輪仏教大学との関係も深く、教授らが出張して仏教講話を担当した(64)。一九〇五年九月に芝天神坂上に新校舎が落成して移転し(65)、翌一九〇六年四月には正式に東京府に設置認可を申請して認可を受けた。同時に教育課程の充実を図るとともに、校内に婦人文庫を設置し、一般の閲覧にも供した(66)。一九一〇年に「高輪淑女学校」と改称し(67)、一三（大正二）年の創立十周年記念会に際し、小林芳次郎は学校設立の動機を次のように述べている。

私が本校を設立致しました動機は、第一私の両親が私を教員にしたいとの希望でありました事、二には少壮時代に檀那寺の大野義海師より、薫陶を受けました事、第三には七里大和尚に、その全生涯を宗教活動に捧げんと誓った事、又四にはキリスト教徒の手に成れる女学校が、何れも繁栄なるに引かへ、仏教徒のは、何れも龍頭蛇尾に終るを見て、如何にも残念に思った事でございます。そしてこの仏教主義の教育に、身を投じたならば、育英の事業にと望まれた両親の意をも空しくせず、一は以て宗教界に捧げんと誓った言にも背かず、志を成し得るのでございますから、で私は愈よ本校を設立するに立ち至ったのでございます(68)

小林の在福時代から、すでに七里恒順は少年少女の教化事業に積極的に取り組んでおり(69)、女子教化・教育事業に着

手するにあたって小林は、その活動から影響を受け、大いに参考にしたものと考えられる。

その後も本願寺派立の千代田高等女学校などが文部省の規定により宗教教育の実施が制限されるなかで、高輪淑女学校では活発な仏教主義教育が展開されたようである。毎朝生徒は、正信偈和讃を勤行し、毎週土曜日には仏教講話会が開かれていた[70]。一九一九年に校舎が目黒に移転し、二一年に「日出高等女学校」に改組されたが、校内に「慈風会」を組織して勤行等が継続され、十二月には報恩講も執行されていた。慈風会は任意団体であったが、二百名程の生徒が入会していたという[71]。

小林自身も真宗信仰を深め、一九一四年に東洋大学に仏教専攻科が設置されると、熱心に島地大等の講義を聴聞し、翌一五年には本願寺派の俗人布教者である教士に補任された[72]。戦時中に小林は没したが、戦後の学生改革で日出女子学園中学校・日出女子学園高等学校となり、二〇一九（平成三十一）に目黒日本大学中学校・目黒日本大学高等学校に校名変更して現在に至っている。

このほか、大分県中津に扇城女学校を設立した梅高秀山（一八五〇～一九〇七）も、龍華教校の出身者であった。梅高は、福岡県築上郡三毛門村（現豊前市）の本願寺派善正寺に生まれ、一八七二年に同寺住職を継職し、七四年に龍華教校に入校した。その後、七九年に寺法編纂委員、一九〇三年に北豊教区管事（現教務所長）・四日市別院輪番などを歴任した[73]。この間、九九年には、梅高が中心となり、中津仏教各宗連合同盟会の事業として扇城女学校が設立された。中津城内の民家を校舎として借用し四月八日に開校した。学科は、家事・裁縫を中心とし、修身・国語・数学・漢文・地理・歴史・裁縫・家事・理科・図画・習字・体操があった[74]。この学校は、東九州短期大学のほか高校・幼稚園を設置する扇城学園となり、現在に至っている。

五、社会事業家の群像

七里恒順は、軍人布教や監獄教誨などでも先駆的役割を果たし、地域の病院設立に協力するなどの社会的活動も行った[75]。また、一八九九（明治三十二）年七月一日には、子の七里順之が恒順の助言を受け、炭鉱事故の遺児たちを受け入れて龍華教校跡に「龍華孤児院」を開設した[76]。こうした影響もあって、その門下からは社会事業のさまざまな領域で活躍した人物を数名輩出している。その代表的人物を紹介しよう。

千輪性海（一八五八～一九一二）は、一八五八（安政五）年、岡山市光清寺に生まれ、大阪で利井鮮妙に仏教学を学んだ後、一八七六年八月に龍華教校に入校し、四年間在学した。その後、自坊に帰って住職を継職し、岡山監獄の教誨師となった。八八年には、自坊内に私立岡山感化院を設立するなど、地域の更生保護事業を牽引する役割を担った[77]。

戸田大叡（一八六〇～一九四三）は、福岡県前原市に生まれ、一八八一年十一月より約七年間にわたって七里恒順のもとで学び、同市円光寺住職を継職した。一九〇八年六月に地域の本願寺派寺院四百七十数箇寺により、福岡県代用感化院創立が決まると設立委員長となり、院舎の建設等で主導的役割を果たした。同年八月の福岡学園の開院に際しては、副園長（園長・七里順之）となり、一九一二年に園長に就任して財政難などに腐心しつつも園の運営を支えた。また戸田は、〇七年の筑紫女学校（現・筑紫女学園高等学校）設立の際にも、設立首唱者の水月哲英を支え、本願寺と補助金交付を交渉するなど尽力した[78]。

木山定生（生年不明～一九三四）は、佐賀市の本願寺派善定寺の出身で、一八八三年二月に龍華教校に入校し、後に本願寺派大学林に入学、九四年に卒業して同寺住職を継職した。日清戦争時には従軍布教使として戦地に派遣され[79]、日露戦争に際しては、郷里佐賀市で「女子義勇団」を組織して、出征軍人遺家族の授産・支援事業を展開した。また、

自坊に精善文庫を設立し、各種書籍・雑誌を一般に貸与するなど地域の社会教育にも尽力した。いち早く慈善事業の必要性を痛感した木山は、日露戦後に内務省主催の感化救済事業が開催されると、これに参加して一九一一年に『文明の慈善事業』を上梓した。本書には、赤松連城や南条文雄のほか、内務省官僚の井上友一、キリスト教者の留岡幸助が序文を寄せている。米国等の事業事例を参考とし、慈善事業の重要性とその方法について論じており、広く社会事業家とも交流したようであるが、詳しい経歴や活動は不明である。(80)

伊藤長兵衛（七代目、号「長堂」、一八六八～一九四一）は、滋賀県犬上郡河瀬村（現彦根市）で製糸業を営む若林又三郎の三男として生まれ、長次郎と称した。若林家は熱心な真宗信者であり、長次郎の実弟の乙吉も本願寺門前の顕道学校に学び、後に七里恒順の薫陶を受けた。長次郎は、一八八二年に繊維品の小売業を全国展開する同郷の六代目伊藤長兵衛のもとへ営業見習として入家した。京都店を経て十八歳で博多店勤務となり、九一年に二十四歳で七里恒順と許へ赴き、その導きを受けて真宗信仰に深く帰依した。翌年、六代目伊藤長兵衛の次女やすと結婚して同家に入籍し、九三年に七代目長兵衛を襲名した。

七代目長兵衛は、丸紅の前身である丸紅商店の初代社長をつとめるなど、経営に手腕を振るうとともに、一九〇九年から一二年まで地元の豊郷村八代目村長をつとめ、一九二五（大正十四）年には、地域医療の振興を図るため財団法人「豊郷病院」を設立した。当初、同病院では町村長の証明があれば、貧困者が無料で診療を受けることができるようになっていた。また転居した芦屋では子女養育のために、一九二七（昭和二）年に地域で仏教信仰に親しむ場として「芦屋仏教会館」を建設した。(81)

平原唯順（一八七〇～一九三三）は、広島県呉市宝徳寺に生まれ、顕道学校・普通教校を経て龍華教校に学び、一八九二年に呉市宝徳寺住職を継職した。地域で青少年教化・女性教化に尽力し、一九一七年二月には、本願寺派大日本仏教慈善会財団が経営する広島保護院・広島修養院・広島育児院の三院長に就任した。院長として事業に関わるな

かで、個々の教化訓育に根拠のない非科学方法が採られていることを痛感した平原は、小河滋次郎や富士川游らの協力を仰ぎ、臨床的調査を実施・発表した。その成果は貴重な記録として、感化教育の発展に大きな役割を果たした。[82]

おわりに

七里恒順の教化を受けた人びとは、真宗信仰に基調に置きつつ、さまざま領域で活躍した。そうした経緯や事情を見ていくと、七里恒順の存在が、従来の宗派や真宗教化のあり方に対して物足らなさや不満を抱く人々の受け皿になっていた可能性が浮かび上がってくる。また在家信者の熱烈な支持があったことも注目される。その背景には、近代の多くの真宗者が、宗派の皮相的勢力の維持・拡大に奔走したのに対し、これと一線を画して民衆教化に専念した七里の姿勢があったと考えられる。[83]

七里とその門下生の活動のあり方は、近代真宗の新たな展開の可能性を示唆するものであったと言える。しかし、それは次世代に継承され、大きな潮流へと発展することはなかった。その原因については、稿を改めて考察してみたい。

〔註〕

(1) 濱口恵璋「あゝ和上」（『親鸞教』四四巻九号、一九一五年九月）、『龍華教校入校名簿』（龍谷大学大宮図書館所蔵）。『龍華教校入校名簿』にすべての入校生に記されていたわけではなく、前身の「甘露窟」時代を含めると、門下生はさらに多かったと考えられる。

(2) 利井明朗「行門信門」（濱口恵璋編『七里和上言行録』第六編追懐、興教書院、一九一二年四月）。また門人の小泉了諦も「拙衲が恩師を大徳として尊称するは、学問にあらず、才智にあらず、度量にあらず、弁舌にあらず、大徳と尊称する所以他にあるなり。（中略）特り師に大徳の尊称を呼ぶは行ふことを先にして言ふことを後にするの一事である。」と述べ

ている（「恩師十三回忌辰所感」〔前掲『七里和上言行録』第六編追懐〕）。

(3) 利井鮮妙「誤解せられたる七里師」（前掲『七里和上言行録』第六編追懐）。

(4) 中西直樹『近代本願寺論の展開』第二章（三人社、二〇一〇年）。

(5) 『小川独笑居士御伝記』（親近会、一九一七年）。

(6) 小川独笑（丈平）著・杉本昇道編『七里恒順師法話妄評録』（興教書院、一八九八年）。

(7) 『本願成就文法話』は、七里恒順の講話を門人である秦法励・神代洞通の校訂・編纂により、博多中島町磊落堂・林斧介により刊行された。原本は未見であるが、『七里恒順師法話妄評録』に広告が掲載されており、前掲『七里和上言行録』にも本書を底本としたものが収録されている。

(8) 杉本昇道は、俗名を昇之助といい、三潴県（現在の福岡県筑後地方）の官吏であったが、官金を費消したため福岡監獄に収監され、その際に七里の教誨を受け、出獄後に得度し万行寺の傍らに昇道庵を営み、七里の有力な門人となった（前掲『七里和上言行録』第一編行実）。

(9) 前掲『七里恒順師法話妄評録』三～五頁。

(10) 前掲『七里和上言行録』第二編語録。また桜井鎔俊も、七里の高弟・村田静照から伝え聞いた話として、七里が称名正因の邪義とみなされ、対応に苦慮したことを記している。（同『我が師村田和上』一三六～一三八頁〔春秋社、一九七九年〕）。

(11) 小川独笑述・井本方外編『前柴録』二五～三〇頁（井本商会、一九一二年）。

(12) そうした宗派の事情に関しては、前掲『近代本願寺論の展開』、中西直樹「日清戦争後の本願寺派に見る起業熱と財界連携」（『龍谷大学論集』第四九七号、二〇二一年三月）のなかで論じた。

(13) 小川独笑述・末永代治郎編『一大決心仏教信仰談』『一大決心仏教信仰談』一八一頁（法藏館、一九〇四年）。

(14) 前掲『七里和上言行録』第一編行実。

(15) 前掲、利井明朗「行門信門」。

(16) 野々村直太郎の経歴に関しては、二葉晃文「野々村直太郎『浄土教批判』の一考察」（二葉憲香博士古稀記念論集刊行会編『日本仏教史論叢』永田文昌堂、一九八六年）、佐々木英明「野々村直太郎の教学――『浄土教批判』をめぐって――」

（信楽峻麿編『近代真宗思想史研究』法藏館、一九八八年）、龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻、龍谷大学、二〇〇〇年）を参照した。しかし、これらの文献は出典を明確にしておらず、若干記述内容に齟齬する点が見受けられる。

(17) 野々村直太郎「入社の辞」（一九一七年三月二十七日付『中外日報』）、「浄土教批判」は、一九一六年十一月二十六日から『中外日報』に連載された。

(18) 野々村直太郎『余が宗教学に於ける浄土教の地位』八～九頁（中外出版株式会社、一九二四年）。

(19) 先行研究としては、二葉晃文「野々村直太郎『浄土教批判』の一考察」（前掲）、佐々木英明「野々村直太郎の教学―『浄土教批判』をめぐって―」（前掲）のほか、大江修「野々村直太郎著『浄土教批判』に関する一考察」（『真宗研究会紀要』六号、一九七四年十二月）、木越康「野々村直太郎と「浄土革新」論」（『真宗研究』五四輯、二〇一〇年一月）、武田慶之「近現代における浄土受容の一断面―野々村太郎の『浄土教批判』をめぐって―」（『龍谷教学』四六号、二〇一一年三月）などがある。

(20) 例えば、弓波瑞明は、『浄土教批判の検討』（文化時報社出版部、一九二四年）の序言で、「この書の内容に特殊の価値がある訳ではないが、辛辣骨を抉るような、皮肉の文字を弄して、あらゆる浄土教徒に向ひ、悍然喧嘩を吹きかけられた」と述べている。こうした点を踏まえ、佐々木英明「野々村直太郎の教学―『浄土教批判』をめぐって―」（前掲）は、論争を「売り言葉に買い言葉といった感じで、学問的論争にはほど遠い」と評している。また、二葉晃文「野々村直太郎『浄土教批判』の一考察」（前掲）も、宗学者側が徹底的した批判を提示し得ず、「不毛の論争」に終わったとしている。

(21) この点に関しても、野々村が七里を持ち出すことに宗学側には反発があったようであり、例えば、弓波瑞明は、前掲『浄土教批判の検討』の序言で、「七里師の法乳の深恩に酬ゆるとは、実に奇怪千万」、「往生思想は宗教に非ずといふ野々村氏の見地から云へば、口が腐ても『安養界裡七里恒順和上』などゝは云はれた筈でない」と述べている。

(22) 黒谷西畔子（野々村直太郎）「反古籠」（一九〇五年八月十七日～三十日付『中外日報』）。顕道学校に関しては、中西直樹著『近代西本願寺を支えた在家信者―評伝松田甚左衛門―』第三章（法藏館、二〇一七年）、前掲『近代本願寺論の展開』第二章を参照されたい。

(23) 中西直樹「明治・大正期東京の青年仏教者―徳風会から東京大学仏教青年会へ―」（『仏教文化研究論集』第二〇号、二

○二〇年一月、東京大学仏教青年会)。一方で野々村は、東京で学ぶ本願寺派関係の学生の親睦会「勝友会」には一八九二年四月に入会している(「勝友会紀念会」〔『三寶叢誌』九七号、一八九二年四月〕)。その後も、『三寶叢誌』掲載の勝友会関係記事から、新年会・例会・報恩講などに断続的に参加していたことが確認できる。また野々村は、顕道学校在学中に反省会に賛成員として入会し(『反省会雑誌』七号、一八八八年五月)、後に正会員となったが(「反省会々報」〔『反省雑誌』一二年一一号、一八九八年十二月〕、いずれも積極的に活動した様子はうかがえない。

(24) 野々村直太郎「孤独の法味」(前掲『七里和上言行録』第六編追懐)。
(25) 野々村直太郎『旧信仰か新信仰か』四七頁(顕道書院、一九〇一年)。
(26) 前掲『旧信仰か新信仰か』四九～五〇頁。
(27) 前掲『旧信仰か新信仰か』五一頁。
(28) 前掲『我が師村田和上』三一九頁。
(29) 伊藤長兵衛「師に導かれて」(『親鸞教』四四巻九号、一九二五年九月)。
(30) 前掲『我が師村田和上』二五頁。
(31) 野々村直太郎『余が宗教学に於ける浄土教の地位』五～七頁(中外出版、一九二四年)。
(32) 真溪涙骨「明治時代の仏教新聞界　中外日報創刊当時の回顧」(『現代仏教』十周年記念特輯号、一九三三年)。後にこの回想は、同著『人間涙骨―時光流転―』(中外日報社、一九六八年)にも再録された。
(33) 常光浩然『明治の仏教者』下、三七八～三八〇頁(春秋社、一九六九年)。
(34) 『普通教校人士』(『石峰』一四号、二〇〇九年三月)。
(35) 「普通教校仮開業」(一八八五年一月五日付『奇日新報』)、「普通教校」(一八八五年一月二十三日付『奇日新報』)。
(36) 「普通教校役員」(一八八五年三月十一日付『奇日新報』)、「普通教校」(一八八五年三月二十五日付『奇日新報』)。前掲『七里和上言行録』第五編には、七里恒順から多田賢順に宛てた書翰が収録されている。多田賢順は、東京築地の本願寺派真光寺の出身で、同寺住職、同派惣代会衆などをつとめた(井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』現代仏教人名辞典刊行会、一九一七年)。
(37) 前掲『明治の仏教者』下、三八一頁。

(38) 真溪涙骨「嗚呼伊藤長堂翁」（安田孝七編『染香人（伊藤長堂翁追慕録）』財団法人芦屋仏教会館、一九四二年）。

(39) 前掲『明治の仏教者』下、三八一～三八二頁。

(40) 前掲「明治時代の仏教新聞界　中外日報創刊当時の回顧」。

(41) 「賛成社員」（一八八四年四月十七日付『奇日新報』）。龍華教校も、賛成社員加入者に名を連ねていた（一八八四年七月三日付『奇日新報』）。

(42) 『書窓漫題』は、干河岸貫一が晩年に自らの生涯を回想したもので、干河岸の自坊である福島県田村市大乗寺に保存されている。

(43) 干河岸貫一の経歴に関しては、中西直樹『新仏教とは何であったか―近代仏教改革のゆくえ―』二九～三〇頁（法藏館、二〇一八年）、『教海一瀾』七六一号（一九三〇五年四月二十七日）掲載の死亡記事、朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史　明治編』一四六・二一五～二一六頁（朝日新聞社、一九九〇年）を参照されたい。

(44) 「敦賀通信」（一八八六年八月三日付『奇日新報』）、「京都通信（月輪正遵）」（一八八八年六月七・九日付『奇日新報』）、「敦賀通信（月輪正遵氏報）」（一八八八年八月十五日付『奇日新報』）など。

(45) 月輪正遵「看客の義務」（一八九七年十月十一日付『奇日新聞』）。

(46) 「奇日新報社の移転」（『伝道会雑誌』一〇号、一八八九年三月）、「移転広告」（一八八九年三月十七日付『奇日新報』）、干河岸貫一「新報社ヲ京都ニ移ス理由」（一八八九年三月二十七日付『奇日新報』）、前掲『書窓漫題』。

(47) 神代洞通の経歴については、中西直樹「海外宣教会とその時代」（中西直樹・吉永進一『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会（１８８８年～１８９３年）の光と影―』三人社、二〇一五年）。神代洞通は、前掲『七里和上言行録』第六編追懐に、七里の教化活動についての回想文を寄せている。

(48) 特別社告「開明新報発兌広告」（一八八九年十月二日付『奇日新報』）。「開明新報広告」（『海外仏教事情』五集、一八八九年十二月）、「日刊開明新報」（『反省会雑誌』六年二号、一九〇一年二月）、「特別広告」（一九〇一年九月八日付『明教新誌』）。

(49) 月輪正遵『同行の鏡（一名成信記）』（興教書院、一八九二年）。本書について、『反省会雑誌』七年三号（一八九二年三月）は、「此小冊子は一名威信記と云ひ八箇条も問答を設けて信心の相状相続の起行住職同行の心得等を述ぶ現著書の姓

名を審らかにせず」との紹介文を載せている。

(50) 月輪正遵、三玄見龍著・発行『日本仏教現勢史』（一八九二年）。本書の奥付にも「著者兼発行者　月輪正遵　福井県平民　京都市下河原通南町第一番戸寄留」と記されている。『海外仏教事情』二三集（一八九一年八月）には、開明新報社よりの仏教系諸団体の情報提供を求める広告が掲載されている。また同二四号（一八九二年三月には、月輪正遵（望天生）からの同様の広告が掲載されている。

(51) 文学寮改正事件に関しては、中西直樹「明治期仏教教団の在家信者教育の一齣―一八九二年「文学寮改正事件」と中西牛郎―」を参照されたい（『雑誌『國教』と九州真宗』解題・総目次・索引』不二出版、二〇一六年）。

(52) 「仏界の日刊新聞」（『反省会雑誌』七年二号、一八九二年二月）、「京都の二新聞」（『三寶叢誌』九七号（一八九二年四月）、「仏教の二新聞」（『伝道新誌』五年四号、一八九二年四月）、「京都新報」（『反省雑誌』八年三号、一八九三年三月）、「特別広告」（一八九三年三月三十日付『京都新報』）。

(53) 月輪望天著・石丸蜻民編『仏教最近之敵―一名、天理教之害毒』（日東館、一八九五年）。

(54) 堺利彦『堺利彦伝』（改造社、一九二六年）。同書一六四頁には、『新浪華』について「編輯局は僅かに十人あまりで、幾らか記者らしいのは、少し後れて入社した月輪望天君と私とぐらいのものだつた」との記述がある。

(55) 涙骨は一八九六年にも、『天理教退治策』という書を興教書院から出版している。原本は未見であるが、『佛教』一一八号（一八九六年九月）に書評が掲載されており、「氏を知れる某氏は曾て悪文毒筆に富める月輪正遵、小田仏乗の手先となりて、藤島了穏を文学寮より放逐せりと言へり、其後「新浪華」の記者として盛に天理教を攻撃せる経験もあり」と記されている。この某氏の発言の真偽は定かでないが、中西牛郎は『仏教最近之敵―一名、天理教之害毒』に序文を寄せるなど、涙骨との親交が深く、涙骨が文学寮の内紛にも関与していた可能性も考えられる。

(55) 前掲『新仏教とは何であったか―近代仏教改革のゆくえ―』第五章を参照。

(56)(57) 前掲「嗚呼伊藤長堂翁」。

(58) 中西直樹「七里恒順と博多柳町婦人教会」（未発表）。

(59) 「仏教演説」（一八九〇年十二月十四日付『明教新誌』）。

(60) 小林芳次郎「逝ける愛妻、雛子への感謝」（『婦人倶楽部』一一巻二号、一九三〇年二月）。

(61)「高輪裁縫女学校設立申請書」添付の小林芳次郎「履歴書」（「私立各種学校（明治三十九年）」東京都立公文書館所蔵）。
(62)「品川婦人教会の発会式」（一八九九年七月六日付『明教新誌』）、「雙蓮女子日曜学校」（『婦人雑誌』一七八号、一九〇二年十一月）。
(63)「私立高輪裁縫女学校々則大要」（『婦人雑誌』一九七号、一九〇四年六月）。
(64)「高輪裁縫女学校」（『婦人雑誌』一九一号、一九〇三年十二月）。
(65)「高輪裁縫女学校新築落成式典」（『婦人雑誌』二一三号、一九〇五年十月）。
(66)前掲「高輪裁縫女学校設立申請書」、「東京高輪裁縫女学校」（一九〇六年八月十二・十五日付『中外日報』）。
(67)「校名変更届」「私立学校（明治四十三年）」東京都立公文書館所蔵）。
(68)「念仏主義高輪淑女学校十周年紀念会」（『婦人雑誌』三〇四号、一九一三年五月）。
(69)一八八一年七月十四日付『教海新潮』、一八八二年五月二十七日付『教海新潮』、「博多教導童講」（一八八三年六月七日付『奇日新報』）。
(70)「高輪淑女学校の勤行」（『婦人雑誌』三四一号、一九一六年六月）、「高輪淑女学校について」（『婦人雑誌』三五四号、一九一七年七月）。
(71)藤村学「仏教関係女学校に於ける宗教教育の種々相」（『現代仏教』一〇九号、一九三三年十二月）。
(72)「小林新教士慶祝会」（『婦人雑誌』三三〇号、一九一五年七月）、小林芳次郎「信仰座談記・島地大等先生を憶ふ」（『真宗の世界』一三巻六号、一九三三年六月）。教士については、中西直樹『真宗女性教化雑誌の諸相〔シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム第三巻〕』第一部第二章を参照（法藏館、二〇二一年）。
(73)「梅高秀山氏逝く」（『教海一瀾』三七〇号、一九〇七年七月一日）、前掲『龍華教校入校名簿』。
(74)中西直樹『日本近代の仏教女子教育』六六〜六七頁（法藏館、二〇〇〇年）。
(75)前掲『七里和上言行録』第一編行実。
(76)金見倫吾「七里恒順の慈善観」（『真宗研究』六四輯、二〇二〇年）。七里順之の経歴に関しては、内務省社会局編・刊『社会事業功労者事蹟』五六五〜五六七頁（一九二九年）参照。
(77)法務省保護局更生保護誌編集委員会編『更生保護史の人びと』一九〇〜一九五頁（更生保護法人日本更生保護協会、一

九九九年）、前掲『龍華教校入校名簿』。また、千輪性海は、前掲『七里和上言行録』第六編追懐に「畳つきの下駄」という龍華教校時代の回想文を寄せている。

(78) 前掲『社会事業功労者事蹟』五六一～五六三頁、仏教徒社会事業研究会編・刊『仏教徒社会事業大観』一八六～一八八頁（一九二〇年）、筑紫女学園百年史編纂委員会編『筑紫女学園百年史』八〇頁（筑紫女学園、二〇〇九年）。

(79) 前掲『龍華教校入校名簿』、『反省雑誌』九年五号（一八九四年八月）所載「禁酒彙報・動静」、中西直樹『植民地台湾と日本仏教』第一章（三人社、二〇一六年）、「木山出仕逝く」（『教海一瀾』八一五号、一九三四年十一月十五日）。

(80) 木山定生編・発行『文明の慈善事業』（一九一一年）。

(81) 前掲『染香人（伊藤長堂翁追慕録）』所収「略歴」、丸紅株式会社社史編纂室編『丸紅前史』六九～七〇頁（丸紅、一九七七年）、佐々木親善編『旧顕道学校同窓所感集』（顕道会館、一九三三年）。

(82) 前掲『社会事業功労者事蹟』五三一～五三三頁、前掲『更生保護史の人びと』二八九～二九五頁、広島修養院（代表・平原唯順）編・刊『異常児童』（一九二七年）。

(83) この点に関しては、前掲「七里恒順と博多柳町婦人教会」のなかでも指摘した。

キーワード　日本仏教史、近代真宗史、本願寺派、七里恒順